

# 世界各国の産業用ヘンプ

第46回

## フランス (2)

### 無形文化遺産による保護・継承とヘンプ生地国内製造への挑戦

赤星 栄志 あかほし よしゆき

1974年滋賀県生まれ。日本大学農獣医学部卒。同大学院にて産業用ヘンプに関する研究により博士号(環境科学)を取得。99年よりヘンプの可能性と多様性に注目し、日本の大麻草に関する伝統文化復興と麻の研究開発に携わる。現在、日本大学生物資源科学部研究員などに在職。主な著書・編著に「ヘンプ読本」「大麻草解体新書」「大麻という農作物」がある。

フランスは人口6700万人を有し、国土面積は日本の約1.5倍。その50%を農用地が占める。本連載の冒頭(2018年2月号)で紹介したとおり、昔も今も欧州最大のヘンプ栽培国である。1965年に大統領に選出されたド・ゴール氏は、農業とエネルギー分野で英米に依存しない独立的な立場をとった。その結果、61年の麻薬単一条約をきっかけに東西冷戦下の西側諸国がヘンプ栽培禁止の国内法を整備したにも関わらず、フランスは特に禁止しなかったことが影響している。19年のヘンプの栽培面積は欧州全体で約5万haだが、フランスはその3割に当たる1万7000haに及ぶ。

#### 無形文化遺産として伝承される長繊維の利用

90年代以降の近代的なヘンプ産業の復活によってフランスでは、ヘンプ繊維を利用した製紙、住宅用断熱材、自動車内装材の生産が産業化した。だが、利用しているのはいずれもヘンプの短繊維だ。つまり、中世以降、ロープや糸、布地のために長らく続いてきたヘンプの長繊維の利用は、ほとんど失われたままなのである。

近年、フランス文化省は独自にヘンプ長繊維を利用した取り組みを無形文化遺産に登録してきた。同省が毎年発行している無形文化遺産目録に20〜30ページに渡る現況調査レポートを収載しているの

で、概要を紹介しよう。

#### 「ブリアンソン地方のヘンプ栽培(15年に登録)」

非営利団体のブリアンソン地質鉱業協会(SGMB)が09年から毎年夏の『忘れられた技術の日』というイベントで学校や地域の人々、観光客に対してヘンプの糸や織物体験を企画している。この地方は山岳地帯で、ヘンプの糸や織物製作は寒い冬の生業だった歴史があり、唯一の伝統的なヘンプ栽培者が一人で献身的に技術の伝承活動をしている。

#### 「ブルターニュ地方におけるフラックス(亜麻)とヘンプの薬用および獣医用の利用(20年に登録)」

07年に設立したリネン&ヘンプ・ブルターニュ協会を中心に、WEBサイトや各種イベントを通じて、亜麻種子とヘンプ種子の優れた栄養価、医療用大麻を含めた植物療法、動物の飼料や敷料として利用してきた経緯について情報発信を

している。デジタルツールや拡張現実(AR)を用いたプロジェクトにも取り組んでいる。

#### 「テキスタイル用ヘンプのノウハウ(20年に登録)」

商業的な大規模な紡績工場は60年代になくなったが、20年時点でも手工業的な織物を製作している工房や職人、同国で最後のヘンプ・ロープ工場や紡績機械会社、ヘンプ播種用種子会社、新しく紡績化に取り組み起業家や農家を紹介している。文化遺産という昔ながらの技術伝承のみに着目されがちだが、技術革新を狙った新しい取り組みにも光を当て、国内の唯一無二な職人から実験的な工場までもすべてリスト化している。文化大国のフランスらしい取り組みといえよう。

#### 100%ヘンプ・ジーンズの地場生産

ヘンプ紡績には、繊維の長さを1・2mと短く採取する亜麻方式(図1)、綿化して繊維長3cmにするコットン方式、約3m程度の背丈をそのまま使うヘンプ方式、レヨンやリヨセル化したセルロース再生繊維の主に4つの生産方式がある。このうちのヘンプ方式を

図1：ヘンプ繊維の紡績工程（亜麻方式）

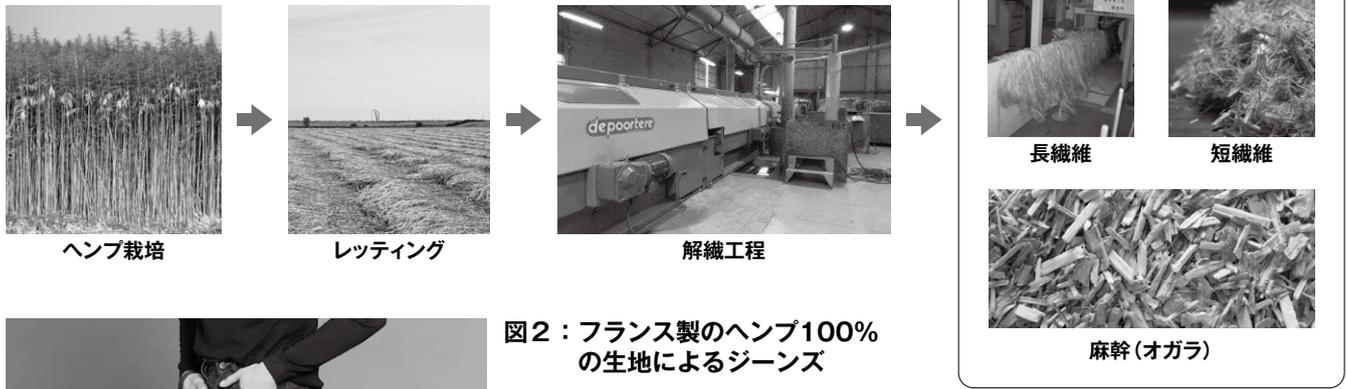


図2：フランス製のヘンプ100%の生地によるジーンズ



出典：https://www.virgocoop.fr

採用したプロジェクトが注目を集めている。南フランスのオクシタニア地方で16年夏に立ち上がったのは、種から栽培・加工・縫製までのすべての工程をフランス国内で、さらに環境負荷を最小限に抑えた小規模な工場で手がけてジーンズを製造する取り組みだ。

まず、ルーマニアからヘンプ糸を購入してジーンズを試作し、ヘンプ繊維の紡績ノウハウの継承者を集め、Virgocoop（ヴァルゴコープ）という協同組合を18年に創設した。同組合は、亜麻や綿花で使われている紡績機にヘンプを合わせるのではなく、背丈が3m程度になるヘンプの特徴を活かした小型解繊装置を開発したヘンプアク社と連携した。20年にやや太め

のヘンプ糸（10-12 Nm）の製造にこぎ着けた。創業1892年というフランス最古のジーンズメーカーの「アトリエ・タフェリー」が染織した、フランス製のヘンプ糸を使ったジーンズは、限定1000本。1本220ユーロ（約2万8000円）で発売された（図2）。

資金面では、地域行政の住民参加型の予算投票で優勝して獲得した6万ユーロ（約780万円）もサポートしている。同組合が掲げている目標は、地域レベルでの社会的、環境的、経済的問題の市民による再構築である。「1000ユーロで、0.5 haでヘンプを栽培し、約70本のジーンズができる」と広報し、一般市民からの出資も受け付けている。当面の紡績装置の開発投資には総額50万ユーロ（約6500万円）を見込む。21年の作付面積は72 haだが、23年までに300 haを計画している。

### 欧州グリーンディール 戦略で注目されるヘンプ

さて、地球規模の気候変動に対処するに、欧州グリーンディール戦略（19-24年）では欧州からの温室効果ガスの排出を実質ゼロにする「気候中立な大陸」という目標を定めている。なかでも繊維産業は、循環型経済の実現に向けて革新を求められている。原料生産段階でも、現状では全体の8%を占める有機農業を25%にまで引き上げようとしている。

ヘンプ業界は、こうした動きをチャンスと捉えている。欧州産業用ヘンプ協会（E-IHA）によると、ヘンプの栽培は土壌再生、水資源の抑制、森林破壊の削減に貢献し、生物多様性を高め、持続可能な農業を推進することができるという。1 ha当たりのヘンプ藁束の収穫量は乾物で約12 tで、二酸化炭素の吸収量は19・2 t。藁束1 t当たり換算で、1・6 tの二酸化炭素が吸収されるというのだ。

また、17年の発刊以来、13言語で翻訳され、世界的に著名な環境本『ドローダウン』（ポール・ホーケン編著）に、今後注目される20の解決策の一つに、環境負荷の高い綿花の代替としてヘンプが取り上げられた。まさにフランスの長繊維の糸からテキスタイルを自国内で製造する取り組みは、欧州の環境・農業政策に合致するのだ。このプロジェクトを通じて、技術的かつ経済的な壁を乗り越えられるか、期待が高まっている。